

シュルレアリストたちの反カトリシズムと、ダリの《聖心》

「アンドレ・ブルトンへの「痙攣」がダリに家族との断絶をもたらした」

《キーワード》アンダルシアの犬 黄金時代 マックス・エルンスト ピカビア バタイユ 陰惨な遊戯

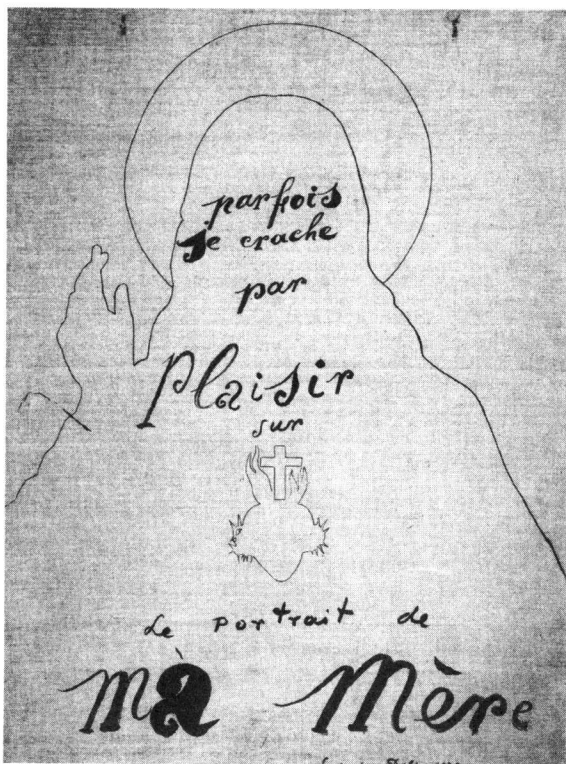
アナ・マリア・ダリ バルセロナ学芸協会 無原罪の御宿り

松岡茂雄

はじめに

ダリの《聖心》(Sacré Coeur)は、彼の第一回パリ個展(一九二九年十一月二十日〜十二月五日、ゲーマンス画廊)に出品された合計十一點の作品の一つである。《聖心》は、キリストの心臓の意だが、アンドレ・ブルトンの遺族から、フランス国立近代美術館(ポンピドゥー・センター)が一九八九年五月に購入して以来、「私は時々、気晴らしとして、母の肖像に唾を吐きかける」(Parfois je crache par plaisir sur le portrait de ma mère)とごうタイトルで所蔵され、展示されている¹⁾。

ダリの第一回パリ個展のカタログに掲載された他の一〇點の作品が、全てカンバス、板パネルもしくは厚紙に、油彩(一部カラージュ)であったのに対し、これだけが、墨一色で、キャラコ地に筆書きされた異色の作品である。制作場所も、他の作品と異なり、スペインカタルーニャのフィゲレス、もしくはその近郊のカダケスでな



サルバドール・ダリ《聖心》(Sacré Coeur) 1929年、布に厚紙で裏打、墨彩、68.3×50.1cm、フランス国立近代美術館(ポンピドゥー・センター)

く、パリであったと考えられる。またこの作品は、ダリが一九三〇年、実の父から勘当され、遺産の相続権を失った原因の一つとなったことでも有名である。

